



SPECIAL ESSAY

THE HIPPIE MOVEMENT OF THE 1960S

『HAIR』の時代、そして今

文＝滝沢哲夫

【1969年 渋谷】

東横劇場（※1）でミュージカル「ヘアー」の日本公演が行われたのは、まだ渋谷の街がきな臭く騒然としていた1969年暮れのこと。なにしろ当時テレビのニュースでは、学生たちがゼバ棒（※2）を振り回し、線路の敷石や火炎瓶（※3）が飛び交う、さながら市街戦のような映像が毎日のように流され、高校生になったばかりの僕の心も穏やかではなかった。主戦場となったのはおもに都内の大学や駅街頭だったが、僕の通っていた高校にも火の粉は飛び始めていた。

※1 当時、渋谷東急東横店の9階にあった劇場

※2 初期は長さ2m太さ5cmほどの角材だったが、のちに鉄パイプが一般化

※3 ビンに灯油やガソリンと布を詰め火をつけて投げる簡易的な武器

この年の始め（1969年1月）には、学生運動の象徴的存在として長期間学生たちに占拠されていた東大安田講堂が、機動隊の激しい攻撃を受けて「落城」していた。その後も学生運動は収まる気配を見せず、さらに過激になり各地に広まっていった。そこに赤軍派による日航機ハイジャック事件（1970年）が起こる。パレスチナ過激派とも連携する彼らは石からライフルへと武器を持ち替えて本格的なテロ活動を展開するが、浅間山荘事件（1972年）以降は革命の表舞台から姿を消していった。そして銃を持つこともできず戦いに取り残されてしまった若者たちは、強い挫折感を抱えつつ社会に戻るしかなく、こうして学生運動の時代が過ぎていった。

【1969年 ウッドストック】

学生たちを運動に巻き込むひとつのきっかけになったのはベトナム戦争だ。60年代初頭から本格参戦していた米国は、日本国内の基地から毎日ベトナムに向けて爆撃機を飛び立たせていた。米国内では徴兵された若者たちが泥沼のような戦争に送り込まれていた。ジャングルにわけいって人殺しをすること、そこで自分が殺されるかもしれないことに意味を見いだせない若者たちは各地で反戦運動を繰り広げ、権力と必死に戦っていた。そんな彼らの心を強く捉えた音楽がロックだった。

1969年夏、ニューヨーク州郊外の牧場地帯に50万もの若者を集めたロックフェスが開催される。ウッドストックと呼ばれたこのフェスに集まった若者たちは、それ以前の米国の伝統的価値観とは異なる人生観を持っていた。彼らはそれまで単なる「音楽」であったロックを「生き方」そのものへ昇華させた「新人類」だ。肌の色も様々で髪を長く伸ばし、七色のタイダイに染められた布を身にまとい「Love & Peace」を唱え、自分の望む人生を自分自身が創造していくという、それまで米国に存在しなかった自由な生き方を社会に示して、ヒッピーと呼ばれていた。

ヒッピーのルーツはウッドストックから15年ほど遡った50年代中期のサンフランシスコにある。当時サンフランシスコにはビートニクと呼ばれる作家やアーティストたちが多く集まっていた。アレン・ギンズバーグ、ジャック・ケルアック、ゲイリー・スナイダーなどがその代表的な存在。大量生産大量消費という物質的豊かさを幸福の理想型とする50年代のアメリカで、ビートニクたちは真逆な価値観とドラッグ体験に基づく独特なカルチャーを作り上げていた。

そして60年代、ロックが全世界の若者たちを虜にしていった時、ビートニクたちの中で青春時代を過ごしたジェリー・ガルシアをリーダーとするグレイトフルデッドはサンフランシスコで最も大きな影響力を持つロックバンドであった。バンドと彼らを取り巻くファン（デッドヘッズと呼ばれた）にとってロックは単なる音楽ではなく、生き方そのものと考えられた。グレイトフルデッドとデッドヘッズは、それ以前のアメリカ社会が作り上げた価値観に合わせた人生ではなく、自分の価値観で自分の人生を自由に生きることを標榜し、ヒッピーと呼ばれるようになった。彼らは全米ツアーによって若者たちの間に熱狂的なファン、と言うよりもむしろロック教の「信者」を獲得していった。

【2013年 シリコンバレー ～ 渋谷】

サンフランシスコとその周辺地域はビートニク、そしてヒッピーへと引き継がれるオルタナティブ（Alternative ※4）な空気で満ちている。ここの空気を吸って育った人間には、常識とされる価値観から全く離れた新しいものにチャレンジする志が自然に備わるようだ。シリコンバレーはその最大の成果物でありスティーブ・ジョブズは代表的人物だ。スタンフォード大学で彼が行った講演の中で語られた「Stay hungry. Stay foolish」（※5）という言葉にその精神が現れている。

※ 4 伝統や習慣にとらわれない、型にはまらない、非体制の

※ 5 ヒッピーたちの愛読書「The Whole Earth Catalog」最終号に書かれていた言葉

よく指摘される日本と米国との社会的な活力の差も、ファッションではない本物のヒッピームーブメントが学生運動以後の日本に生まれなかったことに、一つの原因が求められるのではないかと思う。ジョブズに限らず、シリコンバレーを作り上げたアントレプレナーの多くがヒッピーカルチャーの中で育った人々だ。彼らが生み出し世界に広げたインターネットは、今やビジネスを革新し、政権をひっくり返し、世界を一瞬にして一つにつなぐ巨大なパワーを持つまでになった。そのパワーは「ソーシャル」と名付けられて人々の手の中にある。ヒッピーの後継者たちがシリコンバレーで創り出したテクノロジーがいま「Power to the People」という状況を現実に行っている。（※6）

※6 日本版レコードジャケットで、ジョン・レノンが学生運動の象徴である「叛」の文字が書かれたヘルメットをかぶっていた

時代を覆う空気がいま再び怪しい気配を帯び始めている 2013年、この渋谷に「ヘアー」が戻ってきたことにも大きな意味がある。どうやら時代はぐるりと一回りしたようだ。1969年の渋谷に漂っていた熱気の中から15歳の僕が確かに嗅ぎ取っていた「何か」が、2013年の渋谷でまた動きだそうとしている。